

## 事例2 防災減災への近道は、私たち自身が「よき避難者」となること

文：コミュニティ・クロッシング・ジャパン（CCJ）研修ディレクター 吉高美帆

災害列島の日本で暮らす以上、私たちは誰もが被災者になり得ます。Community Crossing Japan（以下CCJ）は、東日本大震災後の2012年に、人間関係が希薄な大都市において人々は助け合うことができるのだろうか、という危機感から生まれたプロジェクトです。

2005年、CCJ代表が前身となる環境NPO GoodDayを立ち上げ、若者に向けた環境イベントの運営を行ってきました。その後、環境問題を根本から突き詰めると、「大都市のコミュニティが希薄であるがゆえに、あらゆる社会環境問題が解決しないのではないか」という考えに至ったのがCCJの始まりです。

現在では社会環境問題の中でも、より多くの命が失われる可能性のある「防災減災」にテーマを絞り、特に集合住宅やオフィス・商業施設・駅といった多くの人々が滞在する場所への研修やコンサルティングを行っています。

### 防災・減災教育が手薄な「避難生活」に着眼

CCJのつくる研修・ワークショップは、「よき避難者」というテーマを掲げ、既存の防災対策とは異なり、東日本大震災を経て、対策が手薄になりがちであることが確認された「避難生活」に焦点を当てています。

まずは災害からとにかく生き抜くことが大切です。しかし発災直後に無事生き残ったとしても、その後順調に復旧へ向かっているわけではありません。

特に必要なのは、避難所に入れないことも想定した「避難生活」のリテラシー。公的な避難所は絶対的に不足するため、自力で、どこかで避難生活を送らなければならない人々がまちにあふれます。混乱する現場において、平常時に決めておいたルールやマニュアルは一切機能しません。



共助のための防災減災研修を行い“よき避難者”を育てる

参考：<http://communitycrossing.net>

そこで私たちが提唱しているのが「一人ひとりがよき避難者となる」ことです。

被災地でのヒアリングを繰り返すことで、東日本大震災で避難生活が長引いた際、被災者同士が助け合う「共助」により二次災害が少なくなった、そして「大震災のリアル」を知っていればさらに助かる命があったことに気づかされました。一人ひとりが「よき避難者」すなわち「受け身で支援を待つのではなく、変化する状況のもとで主体的に適切な行動をとり、自助だけでなく共助もできる避難者」となることが、大都市の防災には求められるのです。

### 大震災のリアルから得た教訓を防災減災に活かす

たとえば、マンションにお住いのみなさんに参加していただくワークショップでは、現在の防災対策と実際に大震災で起きた事例を見比べ、そのギャップを理解することが最初の一步。「では、みなさんのマンションではどうしますか」というところを住民主体で考えていただくような形で進行し、「自助」だけでなく、人間関係が希薄な大都市において一番欠けている「共助」という部分をベースに、避難生活を「自分ごと」にしてもらいます。

防災対策では、備蓄品が全て準備されていれば大丈夫というマニュアル思考に留まるのではなく、住民たちの力で防災減災のために訓練の「企画を立て、実施して、検討していける」状態がベストです。

乳幼児を含む小さなお子さんがいるご家庭で、非常用食料が乾パンと水のみとおっしゃるお母さんに、「お子さんはそれを食べられますか？」と問いかけると、ハッと気づかれるのです。離乳食や刻み食など、個人に合わせた非常用食糧が必要だと。その積み重ねで、本当に備蓄すべきものは何か、自ら考えていただくようにしています。

今後は、2015年3月に行われる「第3回 国連防災世界会議」のパブリック・フォーラムにおいても「集合住宅と地域コミュニティによる防災減災～東日本大震災の実例と提言～」と題しイベントを行い、CCJの防災対策を国内外へ発信する予定です。ぜひご参加ください。

吉高 美帆（よしたか みほ）

環境省の「今後の環境教育・普及啓発の在り方を考える検討チーム」に環境教育の有識者として選任され、企業・地域・学校教育などの検討に参画。東日本大震災後、防災研修を行うCCJを立ち上げる。